

ボランティア活動中の ケガ・事故について、 考えたことはありますか？

活動中のもしもの事故は、誰にでも、どのような状況においても、起こるものです。一旦、事故が起こると、その影響は少なくありません。

たとえば、ボランティアが活動中にケガをした場合、ケガの治療はもちろんのことですが、活動への意欲が低下したり、精神面への影響も少なからずあるでしょう。また、ボランティア本人のみでなく、家族など周囲も活動を否定的に見てしまう、そんな影響も考えられます。

一方、活動を主催した市民活動団体では、活動を中止したり、それが要因となって周りから信頼を失ってしまうということにもなりかねません。被災地支援の活動であれば、かかわった被災者が心を痛め、協力を自粛することもあるでしょう。それらはいずれも、ボランティアにとっても、主催者にとっても、本意ではありません。

ボランティアは、自分の意志で行動します。だからと言って、「安全と衛生に配慮するのも自己責任」だけではすまされません。

ボランティア自身と活動を主催する団体の双方が、安全衛生の重要性を自覚して取り組むことが必要です。ボランティアが安心して活動に臨める環境がなければ、活動が持続され、参加の輪が広がることにはつながらないでしょう。

昨今、ボランティア活動が多様になる中で、配慮すべき内容も広がり、ボランティアの身体面、精神面、そして個人情報の取り扱いにも注意を払うことが求められています。

ボランティア活動の現場で、どんな事故があり、その対策にどのように取り組むべきか。本号では、「ボランティアと安全衛生」について考えます。



災害時のボランティア活動で 誰も死なせてはいけない。

ボランティアの安全衛生研究会
岡野谷 純さん

プチガイドを使ってオリエンテーションするスタッフ

災害ボランティアの安全衛生を考

えている市民団体がある。「ボラ
ンティアの安全衛生研究会（以下、安
全衛生研究会）」だ。災害という緊
急事態の中で、いかに被災者に支援
をするかに重点が置かれるのは当然
だが、そういう状況だからこそ、冷
静になり、被災地という危険な環境
下で活動をしていることを顧みる必
要もある。被災地でボランティアが
事故やケガをすれば被災者も辛い。
災害により多くの方がケガをした
り、亡くなったりしている。もうこ
れ以上、悲しい思いはしたくない。
そのことをボランティアは常に意識
して活動をしなければならない。

今回は、安全衛生研究会のこれま
での取組み状況や災害時のボラン
ティア活動の危険性について、安全
衛生研究会代表の岡野谷純さんおかのやじゅんに
お話を伺った。

**阪神・淡路大震災の頃は、
安全衛生のことなんて
誰も考えていなかった**

——災害時のボランティア活動の危
険性について考えるようになった

きっかけを教えてください。

阪神・淡路大震災です。私は日本
ファーストエイドソサエティ（J
FAS）という救命・応急手当を
普及する団体で活動しています。
1990年代から、講座の中で「救
命手当をする際の危険性や予防」
について伝えてきました。救急車が
来るまでの間、救助に力を貸す市民
自身がケガをしないように、感染症
にならないように、まずは予防をす
ること、事後ケアの方法、また気持
ちの上でも不安が残るかもしれない
こと、その際の対応などです。

阪神・淡路大震災の発災後、関西
支部メンバーはすぐに救援活動に入
りましたが、一週間後、「とにかく
来てくれ」という電話があり、東京
からスタッフが現地に向かいまし
た。一月という寒い季節、インフル
エンザが流行し始める中、誰もが厳
しい環境で活動を続けていました。
当時は被災者とボランティアが同じ
避難所に宿泊していることも多く、
一週間も活動が続けば疲れが溜まり
ます。ガレキ片付けなどの活動でケ
ガをするボランティアが増加し、発
熱、下痢など体調を崩す者もいまし